
*** 甘い恋 ***

山岡瀬流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘い恋

【Nコード】

N3436A

【作者名】

山岡瀬流

【あらすじ】

きみという素敵なヒトと出会えた。けど、きみには彼女がいた。私はきみから一週間のチャンスをもらった。

第1話＊あまい恋＊（前書き）

はじめまして 山岡瀬流です。

第1話＊あまい恋＊

第1話＊あまい恋＊

私の目標はあまい恋なんかじゃない。

る事

素敵なヒトを見つけ

あまい恋なんてその次。

でも、私の目標は簡単に達成してしまいました。
君とあったから

第2話＊君の名前＊

第2話＊君の名前＊

私の名前は羽咲凜子^{つなきりんとこ}15歳。いままで、恋愛で失敗ばかりしてきた私は、素敵なヒトを見つける事が目標だった。

出会いは、昨日のクラス替え。隣の席になった。君の名前は……
いなもりしゅんすけ
稲森春介

名前順だから、隣になった。

一目惚れだった。かっこよくて、背高くて、めっちゃめっちゃタイプだった。

性格以外は。でも、優しいトコもあって、大好きなんだ。

「おいっ……何寝てんだよ!」

「えっ……?寝てたあ?」

そう言うとな私は大きいあくびをする。

「そりゃあ、ぐっすりと」

「ふっん。あっそういえば、春介って好きなヒトいる?」

「……何で」

少し黙ってから春介は言った。そんなの、お前が好きだからだよお!なんて言えない。

「なんとなく・・・ね？」

「いるよ」「誰!？」

「このクラスの・・・川中ありす。彼女なんだよね」

彼女いたんだ・・・しかも川中ありすって、めっちゃめっちゃもてるし・・・いいなあ。

「お前は？」

「凜子って呼んでくれたら教えるッ」

何いつちゃったの私ー!。駄目に決って・・・

「凜子」

呼んでくれたあ!

「えつ」と、私の好きなヒトは・・・隣の席のヒト」

言った!

「えつと・・・彼女いんだよ?さっき言っただけ?だから・・・」

「それ以上は言わないで!あと、チャンスちょうだい。一週間の間に私を好きにさせてみる!」

「おもしれーじゃん」

あと7日・・・ファイトだ！私ー！。

第3話*グループ*

―1日目

君からチャンスをもらって、今日から1日目

一週間の間に好きにさせるなんて、いきおいでついってしまったけど・・・冗談じゃない！川中ありす・・・勝てる相手じゃないよ。

ううん。あつた勝てるものがひとつだけ。これなら川中ありすにも負けない。

「春介っ」

「はあ？呼び捨てかよ。まあ、いいけどさあ。で、一体何の用なわけ？」

春介はすごく嫌そうな顔でいう。でもそのブスツとした顔がまた好きなのだ。

そんな顔をみてニコニコしている凜子は、ありすのグループに裏で悪口を言われてることを知らない。

「えへへっ。えつと、デートをしてもらいたいんだよね。それぐらいをしないと、好きになってももらえないでしょ」

私は、春介に彼女がいることを知りながらも、デートに誘った。

『好きになつてもらいたいから
たつたそれだけ。』

私がありすに勝てるものそれは馬鹿さではなく・・・気持ちだ。これだけなら誰にも負けない気がするの。
それに・・・私知ってるんだ・・・昨日のありすと春介の約束を。

「いいんじゃない？ありすに昨日言つたし」

昨日忘れたモノを教室に取りに行こうとしたら、声がしたから、外から見てて・・・春介の声が聞こえて、ありすに言つてた。

「凜子にコクられて、一週間の間だけって言われて、多分一週間の間デートも帰るコトもできねえ」

だから誘つたんだもん。大丈夫だと思つたから。

「なにあの‘凜子’っていう女っ！なんか言つたらどうなのありす
！！！！」

先に我慢できなくなったのは、ありすのグループの一人ゆい柚依だった。
柚依は昨日の約束をしないらしい。

「大丈夫だよ。だって、春介はあたしに惚れてんだから。春介は優しいからね」

机に肘をつきながらありすはいった。

「でも一週間の間彼女なのにデートできないなんて・・・」

今度は少しおとなしそうな早苗さなえは言う。

「あたしもそれは言ったの！でも、約束だから・・・って」

「許せない！あの女」

ありすの机を強く叩き、柚依は言った。そして、凜子はそんなことは全く知らず、笑顔だった。

第3話*グループ*（後書き）

やっと三話目ですかね（＾―＾；）これからも『*甘い恋*』をよろしく（・o・）ノお願いしますねm（――）m七日なので、九話目くらいで完結ですかねf（＾―＾；

第4話＊変装して＊

―2日目

デートの当日。ウキウキ気分な凜子は何処に行こうかな。どういう手を使って春介を落とそうか、とそれだけ考えていた。

ありすのコトは考えもせずに――・・・。

今日は休日。待ち合わせ場所は駅で、時間は10時～7時まで。春介の彼女のありすは、この話を春介から聞いていたのだった。

「春介、遅いよ！」

「てめえが早すぎんの」

周りの人を見ると普通のカップルにしか見えなかった。

だけど学校の席が隣同士なだけだ。

そして、急に凜子は駅の時計を見て、春介の手をひっぱった。

「電車に乗り遅れるでしょ?! 春介が遅いからだよ」

と起こりながら切符を買った。

なんなんだよ。コイツ。と思いながら、走っている春介を変装し、後ろから見ている、ありす、柚依、早苗の三人。

凜子がデート以外のコトをしそうだからついていく!と言い出したのはやっぱり柚依で・・・ありすと早苗は柚依にひっぱられ駅まで来たのだった。ありす達はせつせと切符を買うと、改札を抜け、三人は二人と向かい合わせになるように座った。

「柚依ちゃん・・・ありすちゃん・・・凜子」にはばれなくても、春介君には・・・」

と、早苗は言う。さっきからイライラしている柚依はついつい大声を出してしまった。

「うるさいなあっ！そんなにやなら早苗だけ帰ったらどうなの？！」

「しっ」

ありますが人指し指を口の前で立てた。春介と凜子がありすと柚依と早苗のコトが気になっていた。

「前の三人って川中ありすと小野柚依と金沢早苗に似てない？」

それを聞いた春介は凜子に呆れたというような顔で言った。

「いくら彼氏が他の女とデートするって言ってもついてこないだろ。だいたい前に座ったら、バレるってくらい分かるだろ」

ああ納得！というような顔をした凜子。

そんな二人を柚依は黙って見ていれなかった。

「殴ってやりたいな。あの女」

柚依がいうと、

「柚依ちゃん抑えて・・・春介君には気付かれてないみたいだし・・・」

と早苗が言ってからすぐに

「そんなはずないっ！春介は絶対気付いてる。気付いてないフリなの！あたしは前にやってるトコ見たの」

とありすは怒りながら言った。

「でもまあ、怒るのはまだ早かったかな。ありすも怒るのは後にして・・・まずは様子を見ない？。遊園地にはついてないしね」

久しぶりに良いこと言ったかも。と感動している柚依に

「うん・・・」

と一言だけありすは返した。後一駅で。遊園地まで。

「っあゝついた、ついた」

凜子はぐうぐうんと手を伸ばし言った。

「遊園地かよ・・・」

春介は嫌そうな顔をしていたが、

「春介が私に任せたのがいけないんだよね？」

と凜子は怒った。

「これからだよ」

と三人は目で合図した。

第5話＊泣きたい＊

―2日目・遊園地

凜子は春介の手をとり、全然こわくなさそうなジェットコースターを指さした。

「あれ乗らない？」

凜子は言った。けれど、春介は

「えゝもつとデカイの乗ろうぜ。まさかこわいの？ダッセゝ」

（おいおいっ！デートにダッセゝって言われてどうする！）そう思った凜子は、手を強くグーに握り、大丈夫だ。と自分にいい聞かせた。実は、絶叫モノは超がつくほど苦手で、小さいのばかり乗ってればなんとかなるだろう、そう思ってたけど、そんなに甘くはなかった。春介が絶叫モノ好きだとは思ってなくて・・・。

「早くしろ」

「そ・・・だね」

その頃、ありす達は・・・

「あつの女めえ・・・。ジェットコースター乗りやがった。行くよ！」

そうやって二人を引っ張ったのは、やはり柚依だった。

「無理ですっ」

二人は声を揃えて言う。

「はっ・・・はぁ？」

柚依はなに言ってるの？と顔で言っている。

実はこの二人も絶叫モノは大の苦手で、本当は来たくなかったが、柚依に無理矢理連れてこられたのだった。

「吐いても、お腹痛くなっても乗りなよ！特にありす！心配じゃないの？」

「心配だよ……。でも、」

「あ、もう出発しちゃうよ！ほら」

柚依は二人の腕を引っ張り、凜子と春介が乗ろうとしているジェットコースターへと向かっていった……。

「あ、春介見てみて。さっき前に座った三人がこっち来る。乗るのかなあ」

「そうなんじゃね？」

と二人は座った。二人がけなので、隣になった。

係員の方が安全バーを確認している時、あの‘三人’の内の一人が「待ってください」

と、係員に言ったのは、ありすだった。気になったらしく、最後は自分からきた。後から柚依と早苗がきた。

チケットを見せて、きた順に座った。

「もう・・・ありす足はやすぎ・・・」

それから少したって柚依が気付いた。凜子と春介が後ろを見ながら話しているコトを。

「なあ、いま後ろからありすって・・・聞こえたよな」

春介は怪しそうな目で後ろを見る。

「うん・・・似てるとは思ってはいたけど、まさかねえ」

まさか・・・。邪魔しに、ありすと柚依と早苗が来たの？あの目立つ三人グループが？ありすの彼氏と私がデートするからって？

「違うならしつれいだけど、あんたら・・・ありすに柚依に早苗だる？」

「ごめんなさいっ・・・」

そう最初に言っただのはありすだった。

「あ、もう出発するって」

そう話をそらしたのは、やはり柚依だった。

だが、春介に

「後で話そう」

と言われ、逃げれなかった。ジェットコースターから降りると、皆でベンチに座った。もちろん春介の隣はありすに譲った。

「んで〜どうしてついてきた？言っただろ？」

「気になったんだもん。当たり前でしょう?!他の女とデートなん

て・・・浮気じゃない？」

「だから言つたろ？会えないし、帰れないって！」

私と柚依と早苗はこの空気からして、帰ろうか。と言って黙って帰ろうとしたら、

「凜子に残れ」

と言われて残つたけど。話しに入っていけないんですけど——・・・。

「とにかく、今日は帰ろうぜ」

春介が言つた。ありすは泣いてて何も言えない状態だかつて。

私も泣きたいよ？でも二人がいつぺんに泣いたら、春介は困るだろうから——陰で涙を拭いた。

出口から出ると柚依と早苗が待つていた。

皆で電車に乗つた。さっきのベンチと同じ様に並んで。

泣きそうだって事がばれないように、窓をずっと見てた。でも、やっぱり隣に座つてた柚依にばれてしまった。

「まあ、今日はあたしが悪かつたよ。あの二人を連れてきたのもあたし。ほら、ありすの彼氏を横取りするかと思うとついカツとなつちやつてさ・・・」

と柚依は頭をクシャッと手でやりながら言つた。

「いやあ。私も悪かつたよ？ほら私が春介を誘つたんだし。今ははなせないけど、後でありすに伝えといてね・・・？」

「分かつた」

それから何も話さずにただ外の景色をみてた。

第5話＊泣きたい＊（後書き）

ついに5話です＊＊＊甘い恋はまだまだ終わらないかもしれません。
（一週間なのに（T―T））まあコレからもヨロシクお願いします

第6話＊ダイキライ＊

―3日目

昨日のデートは最悪だった。中川ありす達がついてきて、急に泣き出して・・・ずるいよ。

私にはチャンスがないの――・・・？
「あるだろ」

えっ！もしかして聞かれてた？！

「チャンスある?!」

と思わず聞いてしまった。

すると春介は、

「なんのこと？」

と言う。なんだよぉだよね。私のココロの独り言が聞こえるわけないよ。

しょぼんとした私に気づいたのか、春介は優しく声をかけてくれた。

「ごめん・・・な」

「え？」

どうしたんだろう。急にあやまつたりしちゃって。

「昨日の・・・もうついてくんなって言っただから・・・」

そこまでしないでいいのに。だって私は君の好きな人がダイキライなんだよ？二人の中を壊したいんだよ？やなやつなんだよ？それでも、そう言ってくれるの？

「もう・・・いいよ。私・・・あきらめるから。ごめんなさい。迷惑なんて・・・考えてなかった。二人の中を壊そうとして・・・ごめんなさい。もう邪魔はしないから」

私は涙を流しながら言った。こんな言い方・・・私の方がせこいじゃない。

皆の視線を感じた。きつとありすもこつちを見てる。春介には迷惑でも、なんか止まんなかった。

「先生！こいつ具合悪いらしいから、俺が連れてくね」

あ、そうか。と先生は返事をした。春介は皆の前で私を軽々持ち上げた。あの・・・お姫様だっこっていうヤツで。行く途中、皆が言ったのがわかった。

「おいおい！もしやあの二人・・・怪しくね？」

「なあ、あいつはありすと付き合ってんじゃねえのかよ。どうなんだよ」

ありすは

「春介はあたしの彼なの！」
それしか言えなかった。

「もう・・・やだよ・・・好きだけど・・・あきらめるから。幸せに・・・なつてよね」

「やめんの？」

春介は冷たい目でこつちを見た。だつて・・・

「やめなきや・・・迷惑でしょ？もう、春介が幸せなら・・・それでいい・・・」

私は目を手で隠してた。泣いているから。きつとこの顔ブサイクだ

から……。せめて、最後だけは変な顔を見せたくない。

「ふうん。お前の気持ちはそんなもんだったのか？」

と春介は言っではあーとため息をつく。そんな簡単な気持ちなんかじゃない。でも、好きな人の幸せを願うのは……。好きだからだよ？

「なんでよっ……。ありすが好きなくせに……。いちいちそんな事言うなよ……」

いつも隣にいるのは私がいい。ありすが隣にいと胸がイタイ。でも、友達になればいいと思ったの。

だけど、春介が笑顔なんか見せるからいけないんだよ？だから……。気持ち抑えれなかった。

「だって……」

春介はストンつと私を下ろした。私は下を向く。涙は止まったけど、目が赤いから。

「なんで、こんな廊下のだ真ん中で下ろすのよ。風が来て寒いじゃん……」

今聞こえるのは、強い風の音だけで……。

春介は何も喋らないし、気まずい。

「やめんなよ……」

春介がギュッと後ろから私を抱きしめた。

「だめだよ……。廊下なんか誰に見られるか……。ありすにバレたらだめ……。でしょ？」

そんな事を言いながら春介を突き飛ばす勇気がない私がいる。

「とりあえず……。場所変える？」

「そうだね……」

私から春介の手は離れた……。

私達は階段に移動した。

「あ、なんで具合悪いって言ったの・・・？」

すると春介は少し照れ臭そうにコトバを返した。

「お前と話したかっただけ！帰るぞ！」

そう言つて春介は私の手を引っ張った。

「ねえ！！」

思わず呼び止めてしまった。

「なんだよ」

「まだ好きでいいの？」

お願い。うんと言つて！

「うん」

よっしゃあゝと私はガッツポーズ。

「えっ！冗談はやめてよ」

凜子が家に帰るとお母さんから、信じられないことを言われた。

「ホントよ・・・。急な話でごめんね。明後日に出発だつて」

「うそ」

しかも一週間以内？！

ねえ、

春介

わがまま言っよ？

いますぐ会いたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3436a/>

* 甘い恋 *

2010年10月13日11時59分発行